

日本小児感染症学会若手会員研修会第3回安曇野セミナー

概 要

田 中 敏 博*

はじめに

平成 22 年に水戸で第 1 回を開催して種をまき、平成 23 年の安曇野での第 2 回は新しい試みを用意したものの台風の直撃を受けて縮小開催となった本セミナー、第 3 回となる本年は安曇野での再開催となった。そして、昨年は日程変更のために志半ばとなってしまった「グループワーク」に再挑戦する場でもあった。本セミナーの目的は、「小児感染症学/免疫学を志す若手医師に、その基礎と最新の知見を学ぶ機会を提供することにより、将来のこの領域を背負って立つ人材を育成することを第一義とする。あわせて、お互いの親交を深め、情報交換と今後にわたる連携の礎を築くことを期待する」と謳われている。過去 2 回の参加者のアンケートでも、趣旨に沿った内容であったということで一定の評価を得ており、また学会本体からのさまざまな面での応援もいただいて、セミナー定着に向けての本格的な第一歩という気概で準備を進め、当日に臨んだ。

I. 準備から開催までの経過

平成 23 年秋の委員会で、多屋委員と筆者が若手セミナーの担当に任命された。また、今年度より笠井委員が委員会メンバーに加わると同時に若手セミナー担当にも名を連ね、昨年の第 2 回に引き続いて現地リーダーを担った。この 3 名を中心に森内委員長のアドバイスを得ながら議論し、委員会メンバーにも諮りながら、春先から着々と準備を進めた。さらに、参加者への連絡をはじめと

する事務的な作業に関しては、学会事務局の全面的な補助をいただくことで、過去 2 回よりも大幅に効率がアップした。

準備から開催までの間に検討された事項はこれまでと同様で、詳細は第 1 回、第 2 回のセミナーのまとめが掲載された学会誌の概要報告を参照されたい。

唯一の変更点は参加者の募集人数である。セミナーの主要な目的の一つである懇親を充実させるために「約 24 時間のなかでお互いの顔と名前を一致させ、十分な意見交換ができること」を目指すなかで、会場の収容人員も考慮して、これまでも増員した 40 名とした。

開催のアナウンスおよび募集は、過去 2 回より前倒して年度初めより早め早めに行った。

応募は、予定人数を若干名上回ったが、事前に定めた選考基準（初回の参加者優先、初期研修者優先など）に則って 40 名に絞った。

実際には、直前になって 3 名のキャンセルが生じ、補充なしの 37 名の参加となった。

II. セミナー当日

日程表は別紙の通りである。柱となったプログラムは、全体を 6 グループに分けたグループワークである。正味 24 時間の日程のなかだけで完成することは、もとより不可能である。そこで、セミナー前にグループごとに E メールを介してのインターネット会議を行って、テーマごとに意見交換や情報収集を開始し、セミナー当日には各グループのチューターによる「基調講演」を絡めて、

* 日本小児感染症学会研究教育委員会若手研修会担当/JA 静岡厚生連静岡厚生病院小児科

実際に顔を突き合わせながら議論を深め、中間報告を行って、セミナー後にまとめのインターネット会議をして、最終的に報告書を執筆→提出→学会誌に掲載、という段取りにした。実際には、各グループによってセミナーのなかでの発表の形式や議論の方向性もさまざまであった。が、それぞれで期待以上に白熱している様子をチューター陣は目の当たりにした。

セミナーの大切な目的である「懇親」。プログラムとしては、第1日目夕方の「バーベキュー」と、第1日目の最後、症例検討会後の「懇親会」がその中心である。バーベキューには、昨年より恒例となった感のあるスイカの差し入れが長野県立こども病院の中村副院長からあり、また懇親会には、事前の通達に基づいて各自が各地の名産品をもち寄って宴に花を添えた。

わずか24時間の過密な日程ではあったが、最初に掲げた目的を達成するには十分以上の盛り上がりのまま、無事に終了に至った。

グループワークについては、セミナー中に交わした議論、残った疑問をセミナー後に整理し、まとめて、報告書の形で本号に掲載する運びとなった。安曇野を去った瞬間に各自に日常が待ち受けていた現実があり、セミナー中の盛り上がりのままにまとめまでスムーズには運ばなかったグループが多かった模様ではあった。

ま と め

1. よかった点

1. 震災のあった昨年、東北地方の施設からの参加者がゼロであったところ、今回は学会理事の先生方のご尽力の甲斐もあって、福島県から2名の参加があった。

2. 限られたセミナー時間を最大限有効に使うための試みであるグループワークは、その議論の盛り上がりという面では成功であった。

3. 第2回の開催で段取りを把握していただいているボランティアの現地スタッフの協力が今回も得られたことから、前回以上にスムーズな運営となった。

4. 学会事務局の事務作業面での協力が、第2回よりもさらに拡大して得られたことから、若手セミナー担当委員がセミナーの内容にかかわる準備に集中できた。

2. 反省・再考すべき点

1. 開催に関する最初のアナウンスは早かったものの、学会誌内でのお知らせとHPへの掲載が中心で目立つ形にはならなかった。このためか、前回までの手ごたえで期待されたほどの応募人数には至らなかった。

2. セミナー中のグループワークの盛り上がりから、セミナー後も引き続き議論が沸騰して報告書に具現化されることを期待した。が、実際にはセミナーが終わるや否や各自が日常に引き戻され、グループワークの仕上げどころではなくなってしまったというのが現実であった模様である。結果、各グループで報告書を執筆する係となっていた参加者に負担が集中してしまった。この点、大幅に改善する必要がある。

3. 地域により、また開催場所により、参加のしやすさに差異が生じる点は大きな課題であるが、今後もその克服に向けて尽力していく。

4. セミナー全体としては赤字決算であった。参加費を極力安く抑えることは若手の参加を促すために重要ではあるが、セミナーの質と持続性を担保するためにも、バランスをとりつつ再考すべき点である。

おわりに

本稿はあくまで概要を紹介するものであり、実際のセミナーの熱気は本号の他稿から感じとっていただきたい。また、来年の第4回以降、それを実際に体感したいという会員からの多数の応募を心待ちにするところである。

最後に、縁の下の力持ちとして大車輪のご活躍をいただいた長野県立こども病院所属の現地スタッフの皆さん、丸の内病院医局秘書の皆さん、事務作業を全面的にお引き受けいただいた学会事務局の皆さんに、深謝いたします。